
付き合ってください

bakuri

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

付き合ってください

【Nコード】

N6747I

【作者名】

bakuri

【あらすじ】

長年追ってきた彼女が、ついに俺と付き合うことにOKしてくれた。
喜びに浮かれている俺に対し、彼女は。

突然ですが、俺は長年追い続けてきた彼女と晴れて付き合うことになった。

舞台は定番の内の一つ、学校の屋上である。俺はもはや日常茶飯事と言われても過言ではない、日に一度その目的の女性に告白することを怠らないでいて、今日も同じように駄目元で言ったのだ。

あれだ、じわじわと追い詰めていく作戦だ。それが功を成したのか、ついに先日OKを頂戴した。俺は喜びに打ちひしがれて、その場にガッツポーズをしたまま呆然と立ちすくんでいたのはもういい思い出である。気づいたら彼女の姿が見えなくなっていたが。置いていかれたんじゃない、きっと感激に浸っていた俺を気遣ってその場を離れただけだと思う。きつとそうだ。

そして次の日、恋人同士らしく今日の午後の昼休みは屋上で二人きりで昼食をとることになる。

「そういえば告白はOKしたけど、プロポーズはまだしてもらってないわね」

ふと思いついたかのように人差し指を出して、彼女は俺に話しかけてくる。

「あ、ああ、そういえば……。いつも俺が一方的に『日色さん！付き合ってください！』としか言ってなかったもんな」

「懐かしいわねえ。あれがもはや日常だったから少し寂しさを感じるわ。どこのストーカーによって感じだった」

ストーカーとは失礼な。そんな四六時中付回していた記憶は俺にはないが、もしそう思われているならそれは俺なりの愛の形である。

そう開き直った。

彼女はパンと手を叩くと、満面の笑みを浮かべて俺に言った。

「じゃあ、今からプロポーズをしてちょうだい」

「……………え？」

俺は焦る。そういうプロポーズとかいう恥ずかしいことが苦手だから、今までシンプルに力押しで攻めてきたのだ。俺はシャイなのである。

突然の彼女に思いつきに俺は「むむむ無理だよ！ そんな急に！」と両手を左右に振って必死に断る。彼女はじーっと表情を変えずに俺を見つめながら、

「いいからやれよ」

なんていうか、彼女の声音が変わった気がした。思わず「……………はい」と頷く。

俺は圧倒されて必死に脳内から辞書を引いて、プロポーズに最適な言葉を検索、選び、実践してみる。「えと、えと」と情けない声を出して頭で構成したばかりの言葉は上手く言えず、言葉が震えてしまう。

諦めようとしたが、彼女の期待のまなざしと見たいがなんか突き刺さるような痛い視線が俺を動かす。

「ほ、星のほど、星の数ほどの中で、じゃなくて！ ええと、星の数ほどいる人の中で君と出会えたことが……………」

「星の数ほど人はいねーよ」

彼女の表情は笑っているのどこか冷たい表情で投げてきた冷徹な言葉に、俺はピシッと凍りつく。その言葉を理解するのに数分も

の時間を要した。

「やりなおし」

「……へ？」

「やりなおし」

彼女の表情はやはり冷たい。そうだ、目だ。口元は緩んでいても笑っているかのように見せかけて、目だけは笑っていない。凍るような視線が俺を崖っぷちへと追い詰められる、そんな感覚を覚えた。なんでだ、なぜ彼氏である俺がこんなに焦っているんだ。もう俺たちは恋人同士、互いに好きで好きで堪らないはずなのに。ありきたりな台詞がいけなかったのだろうか。

「やりなおし」

彼女は狼狽する俺に構わず同じ言葉を繰り返す。なんのホラーだよ。小柄で人形のように白くて美しい肌を持つ彼女が言うから余計に寒気が増した。

とりあえずこの状況を打破したい、そう思った俺は一心不乱に新しいプロポーズの台詞を吐く。

「あ、あああえっと、ゴホン！ し、幸せにするぞ！ 日色のことは生涯、幸せにするからな！」

「うん」

沈黙。俺も彼女も顔を見つめたまま動かない。

「ええっとその、とにかく俺といたらお前は幸せだ！」

「うん」

「俺がいるからには安心だ！」

「うん」

「ふ、不幸にはさせないぞー！」
「うん」

俺は両手を覆う。彼女が把握マシーンになってしまった。先ほどの状況を何一つ打開できていないぞ。どうする、俺。ていうか、どうしたらいいんだ。

「お、俺も生涯幸せでいられる自信があるぞー！」

「本当のお心は？」

「貴方を幸せにする自信はありません……」

言った傍からハツと気づく。何言っただ俺、いや違う、これは誘導尋問だ。しまった……？ いや、なんでしまったんだよ。俺。彼女はゆらりと立ち上がると、にまあと笑って俺を見た。

「やっぱり、そうだったのね」

ふらふらと彼女は覚束ない足取りでフェンスの近くまで行った。その光景に何やら嫌な予感が俺の頭を余技って、それを考えるより先に身体が動く。

「だ、駄目だー！ 日色さーん！」

俺が彼女の身体を捕まえようと両手を広げながら駆け寄っていくと、まるで闘牛士のように華麗にひらりとかわされる。勿論、俺の勢いは急に止まれるものじゃない。

フェンスがガシャンと不吉な音を立て、俺ごと空中へ飛び出した。つか脆すぎるだろ、なんであるんだとか、この際どうでもいいはずのことを考える。俺は彼女の姿を捉えようと空中で器用に身を翻

す。そして菩薩様のような優しい顔を浮かべる彼女を見て、叫んだ。

日色さ。。

「最後までは言えなかったんだよな、そこで目が覚めた」

俺の友人は顔を顰めた。

「……ナニソノ茶番劇」

「俺の日色さんに対する愛が生み出した夢の内容」

俺ははあと盛大に息をついて、窓から遠い空を眺める。ああ、なんて清清しいのだろう。

「あと少しだったんだよ、惜しかったんだよ。前は告白してOKされたところまでだったけどさ、今度はその少し先まで進んだんだよ。だから次は結婚式かな」

「今のお前、相当きもいぞ」

「いやはや、それほどでも」

友人の皮肉を俺はポジティブに受け入れる。先を見据えずにしてどうやって精進できるのか。

不意にガラと扉の開く音がしてそちらを振り向くと、そこには夢で見たままの美しい彼女の姿があった。

俺は席を立って彼女の元へ行くと、

「次の結婚式は盛大にしよう！」

と自分でもわかる良い笑顔で彼女に云う。

彼女の顔は見えない、彼女の細い足が一瞬見えたかと思っただけの横に衝撃が走って、世界が反転したからだ。

ああ、これは夢の続きが再生するんだなと、俺は暢気に考えていた。

(後書き)

最初の「星の数ほど人はいない」のやり取りが書きたいだけに突発的に書いたので、少し力オスな内容となっています。夢と現実の主人公と彼女は、ボケ突っ込みの役割が逆に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6747i/>

付き合ってください

2010年12月10日05時11分発行